

Ⅲ 地域の特徴的な取組事例

農林水産業は、生活する上で欠くことのできない食料等を供給するだけでなく、森林、農地、海及び川が持つさまざまな多面的機能を発揮することによって、私たちの暮らしを支えています。

食と緑の基本計画2015では、食と緑が支える豊かな暮らしの実現に向けて、県民のみなさんに取り組んでいただきたい2つの提案をしています。

1 「生産者と消費者の思いを伝える農林水産業」に取り組みましょう

消費者の”思い”（＝ニーズ）に生産者がしっかりと応えるとともに、消費者も農林水産物に求めるものを積極的に伝えましょう。また、生産者は商品等を提供すると同時に、生産にかける”思い”（＝こだわり、セールスポイント）を消費者にしっかり伝える努力をしましょう。

新城設楽地域には、豊かな山林やこだわりのある伝統的食文化、平地との標高差を生かした農産物栽培などが盛んです。これらの特徴を生かした消費者ニーズの把握などに取り組みましょう。

2 「農・林のある暮らしの事例」を実践しましょう

農林水産業に親しむ活動を積極的に生活の中に取り入れることです。

具体的には農林水産業に関する知識を深めることや地産地消の実践、農林漁業体験への参加、都市農村交流活動などに積極的に取り組むことです。

平成26年度に地域で行われたこの2つの取組の特徴的な事例を紹介します。
これを参考として今後とも、それぞれの立場から積極的な取組をお願いします。

イチゴのパック詰め作業工程管理基準を活用した 安全・安心な生産

◎取組の概要

農業改良普及課ではJA愛知東苺部会を対象として、イチゴ生産出荷における作業工程管理の導入を進め、品質管理活動を支援しています。

平成25年度までの支援により、収穫直後の品温管理の徹底、調製作業の効率化（簡易規格及びコンテナ出荷導入）、集荷の効率化、時期別着色基準の徹底に取り組む、管理ポイントが明確になり品質管理意識が向上しました。

平成26年度は部会役員会の協議によりパック詰め作業工程管理基準を作成し、部会員に配布しました。

農業改良普及課では、パック詰め作業基準の作成を啓発し、新城市から出荷されるイチゴの安全性確保と品質安定を支援しました。



自然光型の蛍光灯による作業場の照明
(H26.4.28 新城市)

◎取組の成果

イチゴのパック詰め基準には、パック詰め作業で気をつけないといけないこと、絶対に避けなければならないことが絞り込まれ、農家の意見を取り入れたわかりやすい実践的な基準を作成しました。

作業工程管理基準には、イチゴの着色をしっかり確認するために自然光型照明を使用することや、収穫後の品温を上昇させないため、窓光の利用と局所暖房の導入など、日々の作業の中からイチゴ農家ならではのアイデアが盛り込まれました。

イチゴ農家自らが基準作成に関わることで、押し付けではなく、「自分たちが、自分たちのために、新たなルールをつくる」という意識で、今までにないより実践的なものが完成しました。



イチゴの品温に配慮した局所暖房
(H27.1.26 新城市)

◎今後の展開方向

平成26年度で、イチゴは栽培から出荷に至るまでの一連のGAPができたことで、今後はこの管理基準に基づき、安全・安心な新城市のイチゴを消費者にPRし、販売促進に結びつけていきます。

JA愛知東苺部会
イチゴパック詰め作業基準

1 作業場の環境

- 作業場は、出来るだけ乾かして掃除機をかける。床は乾かす。
- 外からの風が直接吹き込まないようにする。窓にはカーテンやブラインドを設置し、直射日光を遮る。外にゴミやゴミ箱などを設置しない。
- 照明（自然光タイプ）で明るさを確保する。作業全体の明るさは行わず、足元をヒーター暖めるなど、局所暖房を利用する。

2 作業時の身支度

- 清潔な衣服を着用する。作業作業で汚れた場合は着替える。
- 帽子をかぶる。髪をまとめたりするなど、髪が邪魔にならないようにする。
- マスクを着ける。
- 作業時に、ハンドソープでしっかり手を洗う。

3 作業台について

- 余裕のある作業スペースを確保する。
- ビニール製のテーブルクロスを敷く。
- イチゴのゴミ、パック、はかりなど、必要なものの以外のもつちなものを置かないこと。

4 資材の保管

- 作業場に保管する。パックは箱に置かないようにする。
- パックはポリビニールに入れたまま保管し、使用時にその状態を取り出す。

5 作業の流れと注意点

(1) 作業の準備

- ① 収穫されたものから販売用パックに入れ、手洗して品温を下げる。
- ② 平置きパックをつくる。
- ③ 業務トレー、シヨウキョーパックをつくる。
- ④ できる限りパックから果実パックを操作、ケース・コンテナに収める。
- ⑤ 出荷まで保冷庫で待たす。

(2) 注意点

- ① パック詰め時に必ず手洗する。
- ② 保冷庫内に取込時に袋状にして詰め、裏面に貼付する。

⑥ 最終の検査
⑦ 出荷前検査員による
⑧ 出荷検査員による検査

平成26年度

作成、配布された作業基準

作手における新規参入者4名の指導

◎取組の概要

J Aトマト部会作手支部では、生産者の高齢化が急速に進み、担い手の確保が急務となっています。そこで、平成22年度から市、J A、普及課でプロジェクトチームを組んで新規参入者の受入支援を行っています。新城市の特徴は、部会員自らが就農林相談会や現地説明会に積極的に加わり、生産者の思いを伝え、新規参入者の受け入れに取り組んでいることです。

平成24年度から、第1期生が1年間の農家実習研修を開始し、平成26年度には4名が夏秋トマト栽培を始めました。栽培施設は、3名が経営体育成支援事業で新規に建設し、残り1名は離農した農家の施設を借り受けました。トマトの栽培管理の基本を習得しながら、部会の平均収量を目指しました。

◎取組の成果

4名の新規参入者に対して、定期的なほ場巡回と生育状況に応じて個別の栽培を支援しました。病虫害防除や肥培管理等、随時発生する問題に対して、その都度現場に出向き個別の技術改善を指導しました。また、J A営農指導員と巡回したり、他の部会員と情報交換することで、問題発生前に対処することを心掛けました。新規参入者の3名が養液土耕栽培を導入したため、給液管理を指導するとともに、地域条件に合わせ、既存の給液指針を改定しました。

平成26年度は関係機関の連携支援と新規参入者の努力により、4名全員が部会の平均収量11 t / 10aを超える好成績をあげることができました。

◎今後の展開方向

平成27年度も新たに3名の新規参入者が経営開始を予定しており、平成27年度は収量12 t / 10aを目標に個別支援を行います。

農業改良普及課では、今後も新規参入者が安定した収益を確保して地域に定着し、若きリーダー農家として活躍できるよう支援していきます。また、部会の高齢化が進んでいるため、関係機関で協力体制を築き、産地の栽培技術を若手農家に継承していきます。



就農研修希望者への現場説明会
(H26.12.21 新城市)



新規に建設したハウス団地
(H27.3.2 新城市)



ほ場における栽培指導
(H26.6.5 新城市)

活かそう森林資源！育てよう若い森林を！
森林資源循環システムモデル施業 現地研修会・報告会・講演会を開催

◎取組の概要

新城設楽地域には約6万4千haのスギ・ヒノキの人工林があり、そのうち約7割が50年生以上の林齢に成長しています。

木材生産機能や地球温暖化防止機能等発揮の観点から、成熟した森林資源を伐採・利用した上で跡地には再造林を行って「森林の若返り」を図ることが求められています。

一方で、木材価格の低迷や二ホンシカなどによる獣害の懸念から、伐って植えるというサイクルができていないため、若い林齢の森林が激減している状況にあります。

そこで、「森林資源循環システムモデル施業」では、森林所有者と設楽森林組合において、施業管理委託契約を結び、森林組合が「木材生産し販売」、「跡地に獣害対策を施して再び植栽」、「植栽後の管理は重要であることから、下刈り等の保育施業を適期に実施し、20年間適切に管理していく。」取組を開始しました。

◆現地研修会等（会場：設楽町）

名称	日付	内容	参加者
索張り・ターヤク ^{ちから} 操作等研修会	11月18日(火) ～19日(水)	県内林業事業者の架線技術者が参加。技術交流を図りながら索張り検討・架設等の研修を実施	県内架線技術者8名 組合職員等6名
田口高校林業現地見学会	12月 3日(水)	伐採～搬出までの一連作業や木材市場見学、循環型林業の重要性を知る見学会を開催	生徒25名 引率教諭2名
地域の森林・林業を学ぶ現地見学会	12月 8日(月)	森林が循環することは、林業だけでなく、地域の活性化にも繋がっていくことを学習	津貝小 生徒12名 引率教諭3名
森林資源循環システムモデル施業現地研修会 (写真①)	12月16日(火)	循環型林業の重要性や皆伐施業の様子、最新の獣害対策等についての研修会を開催	森林所有者等 120名
森林資源循環システムモデル施業報告会・講演会 (写真②、③)	3月 2日(月)	皆伐施業の結果報告と、獣害対策や、コンテナ苗植栽など今後に繋げる講演会を開催 (講師：一般社団法人日本森林技術協会 中村氏)	森林所有者等 120名



写真①<現地研修会の様子>



写真②<報告会・講演会の様子>



写真③<中村主任研究員による講演>

◎取組の成果

地域の森林管理について、一つの方向性を示すことができました。

◎今後の展開

森林資源循環の仕組み作りは、まだ始まったばかりで課題も多いですが、一つ一つ解決していき、地域に若い森林が育てられていくことが期待されます。

森林を健全に次世代へ引き継ぐための啓発活動
元気だぞ林業!! 林業講演会～森林再生を考える～

◎取組の概要

平成26年10月17日(金)、新城文化会館小ホールにおいて「地元にある森林を再生させ、健全に次世代に引き継いでいくためには」をテーマに掲げた『元気だぞ林業!! 林業講演会～森林再生を考える～』を、新城フォレストベース(県新城林務課と新城市森林課の協働の取組)などの主催により開催しました。

現在、森林所有者の森林に対する関心が薄れてきており、森林の手入れ不足が問題となっています。参加した方々に対し、どの様にして地域の森林に向き合えば良いのかを、原点に返って見つめ直し、地元にある森林の再生についてのヒントを伝えました。

第1部は、哲学者で立教大学大学院の内山節教授を迎え講演を、第2部は、(株)フォレスト・ミッション主任研究員の藤野氏の司会進行で、内山教授に加え、旧鳳来地区で代々森林を所有する篤林家の丸山氏を、名古屋からIターンし林業を通じて地域コミュニティの活性化に取り組んでいる田實氏を、県内で数名しか生産者がいない伝統産業の養蚕(ようさん)をこの地域において継承する矢澤氏の4名で対談を行い、各々の実体験を元に話が展開しました。

第1部 講演：題目「所有する森林に向き合うには」

○講師 内山節(たかし)氏(哲学者・立教大学大学院 教授)

第2部 対談：テーマ「地域コミュニティが求めるこれからの森林・林業」

○司会進行 藤野正也氏 ○対談者 内山節氏、丸山潤次郎氏、矢澤由紀子氏、田實健一氏



第1部 哲学者・立教大学内山教授の講演



参加者と活発な意見交換が行われました

◎取組の成果

県内外の森林所有者や林業事業体と行政機関の方々、237名が参加しました。

第1部で「木材生産林における荒廃という固定観念から脱却して、多面的な視点で考える発想の転換が必要との話を聞き、考え直させられた」「金銭価値で優劣を判断している現在の社会構造が問題であると再認識した」や、第2部で「仕事と稼ぎの話や、Iターン者の定着は土地の神様が決めてくれるという話が印象的だった」などの感想があり、参加者の意識の変化が伺えました。

◎今後の展開方向

森林の手入れ不足の問題解消には、課題である境界明確化と集約化施策に取り組むことが重要です。個々の力を結集しつつ地域コミュニティとしてこれらの課題に取り組み、森林経営計画に基づく施策が行えるよう普及啓発活動を継続して行っていきます。

奥三河！まるごと たべりん祭の開催 《JA愛知東とコープあいちの協同組合まつり》

◎取組の概要

平成 26 年 10 月 25 日に JA 愛知東とコープあいちの主催による「奥三河！まるごとたべりん祭」が新城市桜淵公園で開催されました。

JA 愛知東（生産者）とコープあいち（消費者）は、協同組合同士、地域への貢献を広げるため「総合提携活動」を締結し、毎年「山と水と緑の協同組合まつり」（今回 16 回目）を開催しています。平成 25 年、初めて JA 愛知東の「JAまつり」と合同で開催したところ好評だったため、今回も合同で開催しました。

当日は、「JAこども農学校“こども八百屋さん”」や食育推進ボランティアによる「米粉の団子づくり教室」の他、新城市食育キャラクター「お食べん武将隊」塗り絵コーナー、愛知の伝統野菜「八名丸さといも」を使用した「八名丸 2,000 人鍋」の試食など、盛りだくさんの催しが行われました。

農政課では、実行委員会にも参加し、「奥三河！地産地消展示会」をブースで実施、食育の啓発活動を行いました。



奥三河！地産地消展示会の様子
(H26. 10. 25 新城市)

◎取組の成果

当日約 5,500 名の来場者があり、「米粉の団子づくり教室」には、目標 20 名（10 組）に対し、23 名（8 組）の親子の参加があり盛況のうちに終わることができました。また、「奥三河！地産地消展示会」では、80 名以上の方が来場されました。

米粉の団子づくりや展示会を通じて、地産地消、食育推進につながる PR ができました。



米粉の団子づくり教室の様子
(H26. 10. 25 新城市)



八名丸 2,000 人鍋の様子
(H26. 10. 25 新城市)

◎今後の展開方向

- ・前回同様、好評だった「JAまつり」と「山と水と緑の協同組合まつり」の合同開催が、今後も継続して行われるよう関係者と連携し検討していきます。
- ・愛知の伝統野菜「天狗なす」と「八名丸さといも」の消費拡大を目指します。
- ・奥三河を中心とした「いいともあいち運動」のさらなる PR に加え、食育推進事業などを広く紹介していきます。

県・市町村・農協・ボランティアの連携でPR 「山里食育まつり in 東栄」(東栄町)の開催

◎取組の概要

新城設楽地域の農林水産物は、生産量が少ないうえに産地が分散しており、消費者へ特徴やイメージが伝わっていません。

管内市町村やJA愛知東、地域食育推進ボランティアと連携して食育・いいともあいち運動の企画、「山里食育まつり in 東栄」を平成26年6月29日東栄町の奥三河のき山学校で開催し、食育講演会と地元の米粉、野菜等を利用した石窯ピザづくりを行いました。

また、農政課では、管内の農産加工品の展示会「新城設楽山里美味展示会」を同時に開催し、この地域における地産地消の紹介を行い消費者へのPRに努めました。



食育講演会の様子
(H26.6.29 東栄町)



石窯ピザづくりの様子
(H26.6.29 東栄町)

◎取組の成果

- ・「地域食育推進ボランティア」の「石窯ピザづくり」に23名の参加がありました。
- ・食育講演会「食育で楽しく子育て、子供が伸びる！」に40名の参加がありました。
- ・「新城設楽山里美味展示会」により地域の農産加工品のPRができました。

◎今後の展開方向

- ・市町村主催の食育講演会の継続を検討します。
- ・地域食育推進ボランティアとの連携企画の継続を検討をします。
- ・市町村・農協と農林水産事務所の食育・地産地消企画の継続を検討します。



山里美味展示会の様子
(H26.6.29 東栄町)



石窯ピザづくり会場の様子
(H26.6.29 東栄町)

棚田を活用した都市住民との交流活動

◎取組の概要

新城市四谷「鞍掛山麓四谷千枚田」では”お田植え感謝祭”と銘打って、四谷地区の棚田に 1600 本のローソクを灯す都市住民と地域住民との交流イベントを平成 18 年度から開催しており、平成 26 年 6 月 7 日に 9 回目となる”お田植え感謝祭～灯そう千枚田～”が開催されました。

このイベントは、本地域の棚田（千枚田）を守るために結成された鞍掛山麓四谷千枚田保存会・連谷お助け隊・ふるさと指導員等が中心となり開催されています。

建設課では、地元開催組織と連携し、イベントに対する一部物品支援(ローソク等)、準備作業の手伝い(ローソク設置点灯作業)を行うとともに、イベント開催時に参加者へ、当課で地元と協力して作成した四谷千枚田のPRパンフレットを配布、説明しました。



お田植え感謝祭～灯そう千枚田～
(H26.6.7 新城市四谷)

◎取組の成果

・参加者募集はインターネットに掲載することなく、市役所や県事務所にポスターを掲示するだけでしたが、例年 6 月の第二週に開催していることやリピーターによる口コミもあり、大変多くの方々に訪れていただき大好評でした。

・当日は、建設課職員により、四谷千枚田や作業道等を整備した県営事業（ふるさと水と土ふれあい事業）の概要を掲載したパンフレットを 200 部配布し、説明することにより農業農村が持つ多面的機能の重要性や農業農村整備事業の必要性をPRすることができました。

◎今後の展開方向

・今後も農地の大切さを非農業者に伝えることができるよう地元住民と協力し、ともに考え、交流活動を継続します。